

ミスラタで見たものは…

女性・子どもの犠牲のもとで 潤う「戦争ムラ」の村人たち



NATO軍の空爆で破壊されたカダフィ軍の戦車

るために、屋根の下に戦車を隠していたのだ。市場には兵士の衣服が散乱している。ほんの3週間前まで兵士の遺体がこの場所に転がっていた。その数100体以上。異臭が漂うのも当然だ。

市内の病院は、連日負傷者が運び込まれてくるので「野戦病院状態」だった。

5歳の少女が寝ている。カダフィ軍のミサイルが自宅に飛んできた。寝室に大きな穴が空いた。一緒に寝ていた1歳の妹、6歳の兄は即死だった。彼女はこの病院で右足切断手術を受け、

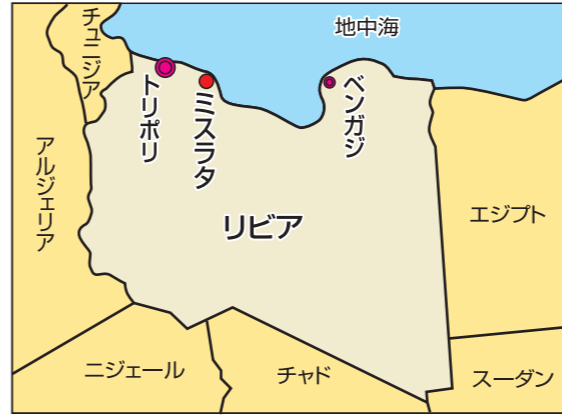
カダフィ軍と反政府軍が対峙する激戦地、リビア・ミスラタに入った。ミスラタは周囲をカダフィ軍に取り囲まれていて陸路では入れない。リビア上空はNATOが「飛行禁止区域」に指定している。飛行機も飛ばない。難民を輸送する船が出たので、その船にもぐり込んで20時間。ミスラタで見たものは、徹底的な破壊と殺戮だった。

「ヤツらはくつろぎながら人を殺していた」

ミスラタ市内を貫く「トリポリ通り」は完全に破壊されていた。通りの両側に黒こげのビルと多数の瓦礫。被災地東北と似たような風景。違うのはビルに空いた無数の穴。戦車砲、ロケット

ト弾、カラシニコフ銃などで撃ち合った結果、ビルには大中小の穴が口を開けている。

その中の一つ「イスラム教会ビル」へ。屋上の壁には穴が空けられていて、その穴からカダフィ軍のスナイパーが狙撃していた。穴の背後には安楽椅子があり、椅子の周りにはスナック菓子やジュースの空き箱。「ヤツらはくつろぎながら人を殺していた」と通訳のバシール。カダフィ軍は傭兵が主体。ナイジェリア、チャド、マリなどのブラックアフリカに加えて、コロンビアやセルビアから来た女性兵士もいたと言う。



今はトラウマに襲われている。少女の名は「マラー

「前線」では兵士が銃を撃ち 対空砲やロケットがとびかっ

市内から30キロも車で走ると、そこは前線である。取材前日も激しい銃撃戦があり、反政府側の義勇兵が5名死亡、カダフィ側にも10名の死者が出た。

首都トリポリに向かう国道を、大きなトレーラーが遮断している。そのトレーラーの周囲には土が盛ってあって、その盛土が「前線」であった。兵士が盛土の上で銃を構え撃ちまくっている。トラックの荷台には対空砲。対空砲の隣には肩からRPGロケット弾を担いだ兵士。

ズドーン、腹に響く轟音とともにロケット弾が発射され、数キロ先で煙が上がった。カダフィ側の前線まで約5キロ。こちらからロケット弾を撃つと、向こうからも撃ってくる。わずか1キロ先で、煙が上がる。

「危ない、離れろ！」兵士が叫ぶ。対空砲に近寄って

ク」ちゃん。アラビア語で天使という意味。

撮影していたので、自陣の放った砲弾の熱で怪我する恐れがあるのだ。ズン、ズン、ズン。間近で撮影していると、耳がおかしくなる。「もう限界だ。長居は危険、早く退散しよう」バシールが促す。車に乗り込み猛スピードで前線を後にする。

私が前線を取材していたのが5月27日午前11時。その一時間後、カダフィのロケット弾が命中し、地元ラジオ局のレポーターが殺されてしまった。ロケット弾や戦車砲で本当に怖いのは破片である。コンクリートのビルや舗装された道路に落ちると、猛スピードで破片が飛び散る。レポーター

このビルの隣に、相対的に破壊を免れた白いビルが建っている。そこは出稼ぎファイリピン看護師の寮だった。カダフィ軍兵士が女性看護師を発見、門番を殺して6名の看護師を拉致していった。「レイプして連れ去ったのさ」とバシール。女性看護師たちはいまだに行方不明。無事だといいいだが。

トリポリ通りを進む。小さな公民館のような建物がカダフィ軍の「戦争犯罪記念館」になった。ビル正面には、さまざまな銃弾が展示されている。ロシア製カチューシャ、ロケット、フランス製対空砲弾などに混じってイスラエル製クラスタ爆弾。

クラスタ爆弾は使用禁止条約が結ばれており、使えば即、戦争犯罪人となるが、カダフィはお構いなし。イスラエルの武器商人も「使えない武器の在庫一掃セール」ができて喜んでいたり。とどろろ。

1歳の妹と6歳の兄は即死 「天使」の少女は生き残り…

「戦争犯罪記念館」から歩いて5分くらいのところに、「ミスラタ野菜卸売市場」がある。中に入ると強烈な異臭。この野菜市場はカダフィ軍の拠点だった。市場の野菜を食べ、商店の品物を略奪しながら、兵士たちは商店に泊まり込んだ。市場の中央、大屋根の下には破壊された戦車が数台。NATOの空爆から逃れ



カダフィ軍のミサイルで右足を失った少女

ミスラタの野菜卸売市場。完全に破壊されていた



はその破片の直撃を受けたのだ。取材当日、NATO軍がミスラタ郊外、首都トリポリなどを空爆し、カダフィ軍に打撃を与えていた。その反動でカダフィ側もなりふり構わず撃ってきていたのだ。

今回は反政府側から入ったので、「カダフィ軍の大量殺戮」について詳細な取材ができた。人々はNATO軍の空爆を支持していた。しかしこれが首都トリポリ側、つまりカダフィ政権側から取材すれば、全く違った光景が広がっていた。NATO軍の空爆でも民間人が多数殺されている。ミスラタ市内に転がる無数の葉莖。義勇兵が肩に下げたFN機関銃。通りに転がるロシア製戦車。多くのリビア人の血が流され、またも武器メーカーが潤った。そして今後はリビアに眠る

石油の争奪戦になる。石油あるところ戦争あり。

日本では「原子カムラ」があつて、東電や経産省、テレビマスコミ、御用学者などが「村人」であった。リビアで感じたのは、「石油企業、軍産複合体、欧米首脳、アラブの石油王たち、武器販売ブローカー」などが「戦争ムラ」の村人なのだ。というところだ。

「使えない武器の在庫一掃セール」 徹底的な破壊と殺戮だった

さつりく